

紀上124° 819°
吉備の神都の詩 あ 紀上134°
⑧884° 和は 鬼 6行

紀上134°
4~6行 2,439°

紀上134°

1の 忍びやか ⑧1004°
1の人でさるさま
小計290° 天軍 自然のめぐりあはれ

紀上124° ⑧3575°
紀上82°
⑧1814-76 須佐 記 52
3行

第三十九章

須佐之男の偉業

八岐大蛇退治

天上の国へ邪馬台国から追放された須佐

之男は、その後、どのようなようにして自らの

いづれのだううか。

須佐之男は、罾から罾へ、そして山かげか

ら山かげへと、恐る恐る進んでいった。

風が吹き、木々が騒めいてさえ、心が震え

た。草や木が威く霊をもち、ものを言ってお

びやかすのだった。暗闇の中を螢火の光く神

が飛びまわり、蛇のようになうるさし邪神達

が耳もとでブンブン羽音を立てた。(神代

紀下第九段本文参照)

なお、先述のようになうるさし

へ拘奴国(中国)の邪一き日鬼の達の本拠

地は、吉備国吉備郡総社あたりにあったの

だうう

と思われ、(第十章へ拘奴国の都の項参照)

この根拠地の真只中を行く訳にはいかな

→ H4.3.8 ④
紀(星)53P
紀上121P

主5うぐつ
境遇 56P * 持系段民は箸を用いたか
斐伊 地名 127P
H28(2016)6.3
2,440 P 1/2 紀(星)53P
「おかしら」 2443-1/2 25P

紀上121P 土重の麓の川上 鳥
124P 可愛の川上

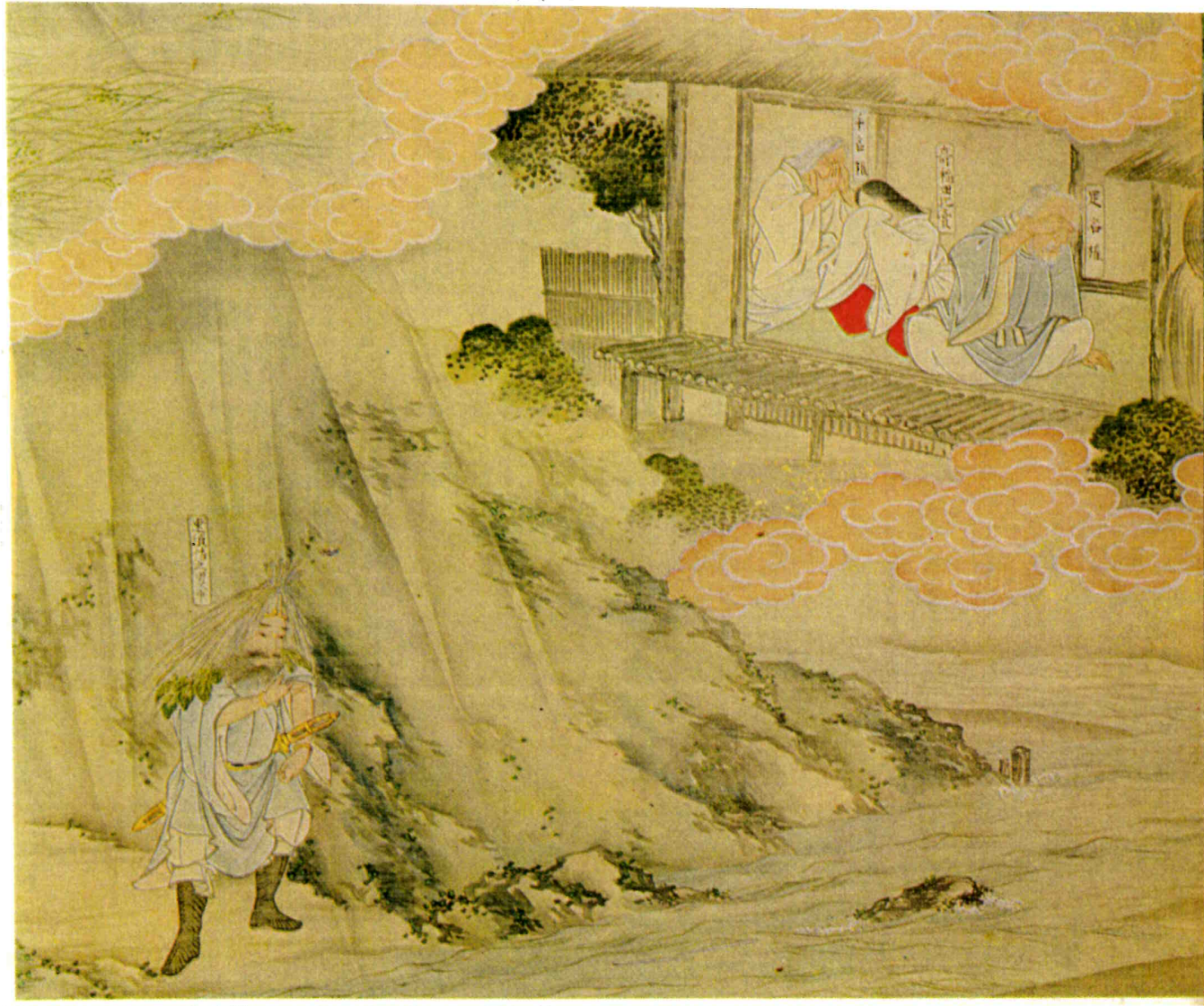
紀上

また、山陰地方の海岸に沿って東進するの
も危険極まりない。とである。(広島県西部)
須佐之男は、安芸国の可愛の川上に下り
り、――そして人目にふれないように気を配
りながら中国山脉の山中を密かに東へ東へ
と踏み分けて行き、やがて(現在の出雲国の)
簸の川上、名は鳥髪(斐伊川上流の船通山)
あたり」という地に降った。(神代紀上第八
段本文・一書第二。記ハ八俣の大蛇退治参照)
この時、須佐之男は、その河(斐伊川)を
流水下ってくる箸を見つけた。(記)
箸か。うむ、間違はなく箸だ。この拘奴国の
統治庶民が箸を用いる箸など無い。
この山の奥深くに「箸を使う者が住んでい
るのだらう」
・素戔嗚は「川の上流方向を見やりながら呟
いた。
述べるまでもなく、素戔嗚が「箸である」と理解したというのだから、
素戔嗚は後人達、日常的に「箸」を用いていた。
ということが分かる。
川の流れをたどって尋ね探し求めて行くと
やがて、人の泣き声か聞えてきた。(第326回)

素戔嗚「斐伊川の川上に至る」参照

2444P 岡山県史

- ・カラー
- ・右頁の上半分に大きく掲載下さい。
- ・できるだけ鮮明にお願います。



1429 第326回 ^{すさのこ}素戔鳴 ^ひ敷 ^{かわかみ}の川 ^{いた}上に到る ^{えことば} (「古事記絵詞」)

『神々の里』心のふるさとを求めて日本発見(20)、^{みづき} 暁教育図書(株)、昭和56年2月1日発行、48頁参照 ^{おのゴリツ}

222) 54^P 221^H 220^H 紀上 117^H 114^H 2448^P 紀上 121^P
 7<5<21483 117^H 114^H 2448^P 紀上 121^P

とある家に、老公と老婆がいて、中間に一の少せを置え、撫でながら哭いてゐるのだつた。つかつかと歩み寄つた素戔嗚は「おまえたちは誰なのだ。またどうしてそんなに泣いてゐるのか」と尋ねた。(以下第6表参照)

素戔嗚の妻をこねごね見つめていたか、やかて、こう答えた。

「私は、天上の国の国神大山津見神の子孫で、名を脚摩乳と申し、妻の名を手摩乳と申します。この童女は私どもの子でございまして、名を奇稲田姫と申します。泣いておりますわけを申し上げます。実はもと私どもの子には八人の少女が居ましたが、年毎に一人ずつ八岐大蛇の為に吞まれてしまつた。今年もまた高志(「出雲国風土記」神門郡古志郷)昔は海に面していた。現在の出雲市古志町)の八土記(「出雲国風土記」神門郡古志郷)昔は海に面していた。現在の出雲市古志町)の八侯遠呂智がやつてくる時が参りまして、最後にこの二つたこの娘が吞まれようとしておりま

す。運命をのかれるすべもございませ
の。悲し人で泣いてゐるのでございませ
話を聞きや。曾ての男王、そいて未来の根国
の男王素戔鳴は、勅(詔)してこう言つた。(記・紀)
「そうか。そういうわけなら私が、この根
を助けてあげよう。そいてこの拘奴国の向う
にあるという母国(出雲国)へ連れていつて
やろう。お前は、奇稻田姫を、私にくれる
か」
ここに、老夫婦は、なからも不安げに言
つた。
「恐れながら、未だ御名を伺つておりませ
ん。ぜひ、何方様なのかを、お明かして下さい
ませ」(記)
素戔鳴は天上の国の女王日御子の同母弟で
佐々男という者だが、この地ではその名
を伏せておきたり。葦原醜男とでも呼んでく
れ、この水から母の国へ下つて根の国を作ろう
といてゐるところだ。
脚摩乳と手摩乳の二人は、素戔鳴の言葉を聞

$$\underline{2,442^P - \frac{2}{2}}$$

2145 大々的に行っていたから、
幾人の子供ではあまい。

2,443^P - 1/2

こと

2143^P 同

250年 2420⁺ 2432⁺ 13所
2440⁺ 7所 もしかたら
2440⁺ 17所

もーかいたら、
七月（西暦二五〇年陰暦七月）頃、こ
の鯨の川上に降ったのかも知れない。
前述のように、左のように、
鮮卑東夷伝第三十には、
「北沃沮の」老人がこの国（北沃沮）の
者が、むかし船に乗って魚を捕っていた時、暴
風にあい、数十日も吹き流され、東方のある
島に漂着したことがあります。その島には人
はいるものの、言葉が通じません。その地の
風俗では、毎年七月に童女を選んで、海に沈
めます（第三章老人が語る「おきな話」におり既に
と記されていゝる。
うまでもなく、確証はないものの、
倭国の東の、
鐸文化圏（中国・近畿地方）では、
当初の弥生人の子孫達が、その昔からの
風習に従って、毎年七月に童女を選び、
（リ）に吞ませたの、
コクヨ ケー20 20X20

次頁
から

又.443^{P-2} 同文 ㊦2145^P 長者 1452^P ㊦2145^P

と想像される。(広辞苑へ海へ入る)参照

つまり、

天上の国から追放された

素直な男

奴国の扱失・然社あたりを避けー現在の出拘

雲国の鯨の川の川上に降り着き、この地に於

て、八岐大蛇八人の長者。つまり八人の大

者達に連れ去られようとしている奇稲田姫

を助け出す

と推察される。

資料(25) 25-485 人権 水野 岡山 美作国 東郷部 八束 41.11.28(4) 2.444 今昔(3)-546 今昔 太平記②-49 童女をリケに人にする
 岡山 美作国 東郷部 八束 41.11.28(4) 2.444 今昔(3)-546 今昔 太平記②-49 童女をリケに人にする
 岡山 美作国 東郷部 八束 41.11.28(4) 2.444 今昔(3)-546 今昔 太平記②-49 童女をリケに人にする

前頁

なお、童女を生贄にする風習は、
 地方の山間地一帯で、
 長らく続けられていたようである。

今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に

今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に
 今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に

今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に
 今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に

今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に
 今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に

今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に
 今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に

今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に
 今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に

今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に
 今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に

今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に
 今昔物語に美作国神依狛師謀止生贄語第
 七に

*

お刀 小鉢 P
ふ 921
お 赤(黒) 55
生心 蛇上122
記黒 55
蛇上122
佐 果 1791
まこと 蛇上
酒樽 870

船間（八面）作り、こしら各々に一つの槽（酒）を置いて酒を盛らせた。
 須佐之男は、脚摩乳・手摩乳に命じ、八
 退治の準備にとりかかった。
 素戔嗚尊は、八岐大蛇（長者）

主 7P1 挿 589³ 斬り伏せ 593³ 倒付 倒付
紀上126 58¹ 毒酒 紀上126 48¹ 紀上129 29¹ 紀上126 21¹

2,446 P 1/2

とつかつる 十拳剣 126¹ いちめい 云 126¹ 紀(4) 56 48¹ (ニ)

虎正 紀上125¹ 2¹ 5¹ 126¹ 5¹ 天はけきりの食り 木3斤

ぬむ 心む 1730¹

者らは、たゆりもなく睡ぬむってんていしまった。

素す佐さ之の男おとこは、身みに帯おびびて、いた十拳剣とつかつるき蛇へびの

韓鋤かんす之の劍けん。蛇へびの虎正こせい、天蠅てんそう斫さく劍けんなどともいう

を抜き放はなつた。素す佐さ之の男おとこが、このとき手てにていた

と、十拳剣とつかつるきのこゝとを、一名いちめい蛇へびの韓鋤かんす之の劍けん

拘奴国かうにこく(韓国かんこく)の山中さんちゅうを東ひがしへ向むかう途中ちゅうちゅう、かな

りの身分みぶんある者ものから、この蛇へびの韓鋤かんす之の劍けん

を奪うばい取とったのであろう、と想察そうさつされる。

本末ほんまつ、北朝鮮ほくせん一帯いつたいから渡来わたくした人々の国くにであるにもかかわらず、

倭人わじん達は、日韓国にっかんこく(拘奴国かうにこく)と呼んで、いたのだらうか、

また、蛇へびは「刀やいば」の意いであり、

「蠅へい」は「蛇へび」のことという。(「日本書紀」

(山)日本古典文学大系、岩波書店、一二四一

二七頁参照)

素す佐さ之の男おとこは、毒酒あいつさけを飲のんで酔よいつぶれ、眠ねむ

り、掛かつてくる徒者とせうたちを次つぎから次つぎへと斬きり伏ふ

せ、つた。頭あたまを斬きり、腹はらを斬きった。(「神

(拘奴国)と呼びなうたのかも知れない。(第一表参照)

2606^P 56^P

紀上122^P

2.446^P - 2/2 2448^P 紀上126

1190^P

1580^P

紀上126^P 45^P

代紀上第八段一書第三参照

だが、八人の内の頭目である真中の男、つまり口中の尾（記）は、さすがに、酔い痴れながら、激しく抵抗してきた。

剣と剣とが火花を散らす攻防が続いて、其の尾（男）を斬る時に、須佐之男の剣の刀が、少し欠けた。凄惨な戦いであった。

しかし、神性雄健な須佐之男は、ついにこれを斬り裂いた。散り散りに逃げ行く者達を逃げるにまかせ

素文鳴は、死んで横たわる中の男の持物を調べ、中男が手に持っている剣とは別の一つの剣

があった。（神代紀上第八段一書第三参照）

「これは、どうやら霊剣のようだ」
須佐之男は、ギラギラ光る剣を見つめな

がら言った。

これが、いわゆる天叢雲剣（草薙剣）である

は、須佐之男の後年、この都牟羽（瀧沢）の大天孫根（天

に当たる

元冬夜)によつて、天に上奉げられたといふ

(神代記。神代紀上第八段一書第四参照)

恐らく、天叢雲剣は、——出雲国(現

在の近畿地方)から天上の国(九州地方)へ

上奉げられたのであろう。

■その後、いつの頃から定かでないが、天

上の巨では、^{やたのかみ}日ハ咫鏡^{あまのむらさきのつらぎ}と、天叢雲剣

とが、倭王継承の為の神璽とされた^たよう

えられる。(「日本書紀」(上)日本古典文学大

系、岩波書店、五七の頁補注二一九参照)

そしてまたその後、(崇神天皇に相当する)

継体天皇を竊立する直前、^たになつた時のこ

とであつたらうか(第一表参照)

へ二朝時代の発足に當つて、^た更に鏡が鑄

造され、剣が造られたら^たの^たあろう

と想察される。(第一表参照)

■すなわち、倭国内に、^た日鏡二面^たと^た日剣二

本の神璽が存在することになった。

■それから以降の

幾多の変遷の結果のみを述べると、

●二つの鏡のうち、一つは宮中に置かれ、

②441 17 つくづく見つめていたが

ほとと 施す 元2045 2.448P
みるめ(示す)

綾杉文 2x50Pの裏 ②446-1/2 加茂岩倉遺跡 5p. 2450P
銅矛九門遺跡 ②452-1/2 9P 「土代生きた文化」 26P ②440P

荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡

山陰地方の簸の川上で奇稻田姫を助けた時
須佐之男は倭国で見なれていたものを目にし
たのではなかうか。

息絶えた者達の手中に、あるいは地上に
散らばっている銅剣などに混って、幾つ
もの銅鉾(北九門の武器)があつたように想
像される。

もしかいたら、それらの銅鉾のうちの何本
かには、綾杉文が施されていたかも知れな

い。
須佐之男は、それらの鉾に、懐かしさを覚
え、しげしげと見入った。

もしかいたら、それらの銅鉾のうちの何本
かには、綾杉文が施されていたかも知れない
(写真図版 403 入研ぎ分けのある銅矛参照)

②449P-1/2 18P

②449P 18P
②450P 3P

21

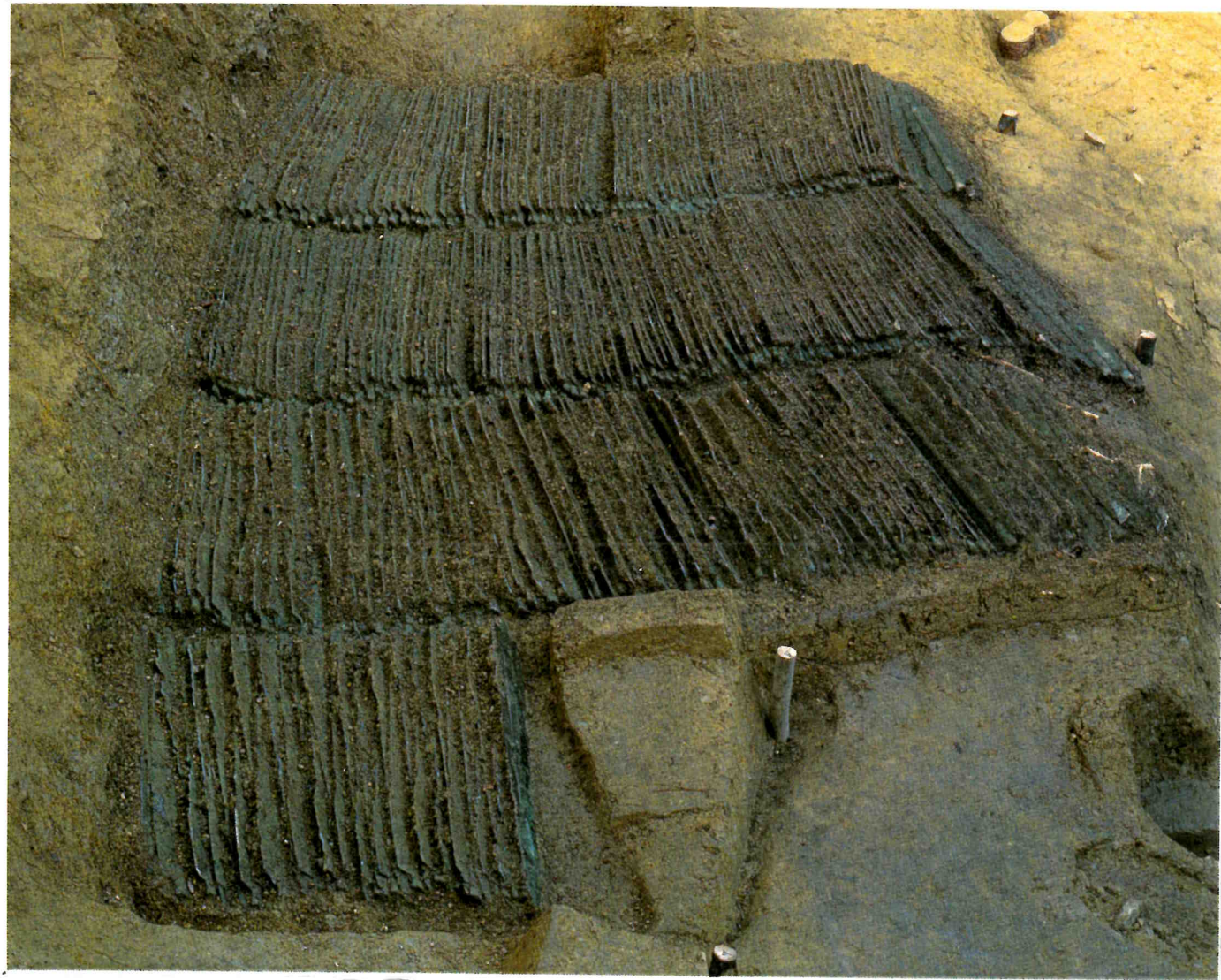
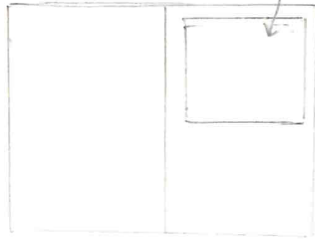
均衡が突然崩れ、倭国と倭国との
 力の前に屈することになる。襲いかかってきた
 拍奴国中が大混乱に陥り、人々は下
 大切に散って来た祭器である銅鐸を辺鄙な山
 の斜面などに埋めた。
 山陽地方から山陰地方へ追いつめられてしまった落
 人達も、ついに降伏の止むなきに至った。
 落武者達は、とある小さな谷間に集結し、
 倭人達から見つからないように気を配りながら
 大きな穴を掘った。
 敗残者達は、悲愴にも、
 一つの日に、我国を強奪した倭人達を
 追ひ払い、今一度、祖国拍奴国を再建しよう
 と固く誓い合った。
 涙ながらに銅鐸や銅剣を穴の中に並べた人
 々は、さらに又、蜂起の時の一助とする為、
 倭国軍から奪い取った銅鐸をも穴の中に入れた。
 ー、そして土をかぶせ下埋め隠した。
 いれば当然のことながら、もともとから拘

2,449^p - 3/6

2701^p - 3/2

・カラー
 もっと
 明るくしておいて下さい。
 (暗くならないようにお願ひします)

・右頁の上半分に、
 大きくはみ出して
 掲載下さい。



古代生野展
 41頁にも
 同一写真あり
 解説が違ふ。

132G

142G

写真図版 400 ^{こう けん たい} 荒神谷遺跡出土の銅剣 (358本)

前頁 118 頁 ~

2458^p - 3/5 15

^{どう たく} 銅鐸の谷

アサヒグラフ [別冊] 朝日新聞社 1997年11月10日発行 80頁参照

122G

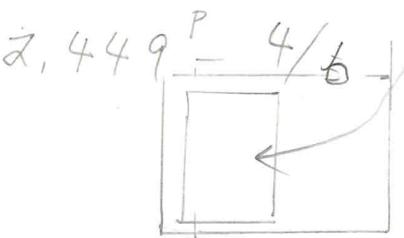
これらは、谷の奥の丘陵斜面で見い出された。[^{か ち け ち ゅ う} 加茂岩倉遺跡 (同じく丘陵斜面の遺跡) まで約3.3km であり、近い。]

・扶余系殷民の子孫達が青銅製品を作ったのであろう。(しかし埋納直前の武器所有者などの部族だったのかは不明)

34^p

・カラー
 ・日暮くをうたい
 ようにお願い
 します。
 ・出来るだけ
 明るくお願い
 します。

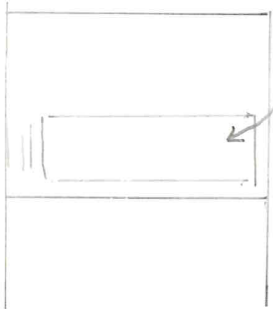
・右頁の下分に
 大きくはみだして
 載せて下さい。



1409 聖真図板 401 武^{ニウ}神^{イナ}谷^{タレ}遺跡出土の銅鐔^{ニウタ} (6個) と銅矛^{ニウボ} (16本)

『戦後50年 古代史発掘 続まぐりムササビラツ別冊 朝日新聞社 1996年4月10号 167頁参照』
 は、銅鐔^{ニウタ}の魚首^{イサノヘ}を立てている。銅矛^{ニウボ}は、刃部^{イハ}を立て、切^キ、先^{サキ}と基部^{キョ}を交互に配置している。
 銅鐔^{ニウタ}を所持^{ショク}していたのは、当初^{トウジ}の弥生人^{ヤシロヒト}達だ、たのてあろう。
 銅矛^{ニウボ}と銅鐔^{ニウタ}が同じところで見えたのは、初めてのことだった。

・カラー
左頁の右半分、
縦長状に
大きくはみ出し
掲載下さい。



＊化粧斜斗面に
埋められていた、
ということを
示した。

2,449²-5/6



カラー上

1309

1409

写真図版 402 荒神谷遺跡出土情况

『古代出雲文化展』島根県教育委員会、朝日新聞社、1997年4月26日発行、41頁参照。
1209
・銅剣出土地点から谷奥へ7m離れた丘陵斜面の中腹で、銅矛16本と銅鐸
6個が発見された。

せはめろ

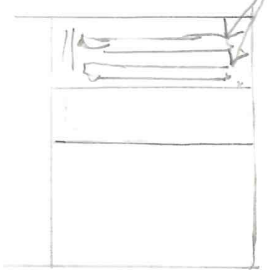
・カラー

・左右共、斜めの模様が
消えかきように、注意して
下さい。

【出来るだけ鮮明に
お願ひします。】

・左頁の左半分に
大きくはみ出して
載せて下さい。

2,449^P-6/6



・荒神谷遺跡へは
(と) (か) (どう) (は)
研ぎ分けのある銅矛が
1本確認された。

2449^P-7/6 1841

1404

写真図版 403 研ぎ分けのある銅矛

『古代出雲文化展』島根県教育委員会、朝日新聞社、1997年4月26日発行、49頁参照。
 ・左は、佐賀県杵見谷遺跡7号、中広形。右は、荒神谷遺跡17号。
 ・銅矛の分布は、九州地方に集中している。現在、荒神谷遺跡出土の銅矛は、北部九州にて
 製作したのち出雲へ搬入されたものと理解されている。

あやめか
へ 継柄文 2448^P 1841

Sfile 2450^P

鉄系銅系銅かけを考へていたのかどうか
2451^P 銅

2.450^P

S60, 10.20. Sfile 2450^P

≪ 蘇鉄 S60.8.25 S60.9.11

かっ て お り、北 部 九 州 から 現 在 の 出 雲 の 地 に
伝 え ら れ た の で あ ろ う と い わ れ て い る。
綾 杉 文 の 銅 鐙 は、切 っ 先 から 柄 に かけ て の
刃 の 部 分 の 両 面 に、斜 め の 研 ぎ 目 八 幅 一 五
二 分 一 を ほ ぼ 等 間 隔 で 並 ら べ、中 央 の 線 を は
さ む 切 っ 先 方 向 に と か っ た 綾 杉 状 の 文 様 を 形
成 し た 鐙 の こ と で あ る。鐙 出 さ れ た 文 様 で
な く、鐙 型 から 取 り 出 し た 後、研 ぎ 出 し に よ
っ て つ け ら れ た も の で、光 が 当 た る と 下 等 間 隔 の 研 ぎ
分 け 部 分 が 輝 い た り かげ っ た り す る よ う に な
っ て い る。(「朝 日 新 聞」 S60.8.25 S60.9.11
S60.9.11 付、S60.10.20 付 等 参 照)
また、銅 鐙 十 六 本 の う ち の 一 本 (十 号 矛)
に、欠 け た 部 分 を 鑄 造 し な お し て 継 ぎ 足 す
鐙 かけ 凸 の 技 術 が ほ と 二 さ れ て い た。
鐙 かけ 凸 は、古 代 青 銅 器 の 先 進 地 中 国 の
殷 代 から 見 ら れ る 高 度 な 技 術 で あ る。
た ぶ ん、殷 民 王 族 簠 の 子 孫 達 が、こ の
鐙 かけ 凸 の 技 術 を、奇 く も 東 海 の 島 地
九 州 へ も た ら し た の で あ ろ う。
北 九 州 出 土 の 銅 鐙 や 銅 戈 に、鐙 かけ 凸 の
技 術 が 見 ら れ る と い う の で あ る。(「朝 日 新 聞」

2.451^P-1/2

561.3. 3 付参照

●あるいは

へ北九州

~~箕子の子孫達が支配している~~

で日鑄

かけらと施した銅鑄が下拍奴国

の者達に奪われ、いまの出雲の地に埋められ

た✓

という経緯があったのだろうか。

*

■

なお

「縄文晩期に渡来した扶余系殷民の子

■

孫達

が

箕子の

子孫達

も、

ともに

日鑄

かけ

ら

の技術を持っていた可能性が大きいであろう

る。

■

因

みに

述べ

ると

「

「大阪

湾沿岸

から

出土

する

銅鐸

に

「日鑄

か

けらの技術が見られる

という

「

朝日新聞

561.3. 23

付参

照

■

さらに

述べ

ると

「

「瀬戸内

海沿岸

、

および

九州

を中

べ

とする

2,451^p - 2/2

Spile 2450^p

HV

平形銅剣にも
（どうかん）
下口鑄かけの技術が見られ

る

と
いう。 7 朝日新聞 L S 60・9・10 S 60

9・11 S 61・3・23 付参照

ト

されら口鑄かけの技術が、どの種族に

よって施され、たのかについで、は、今後の

調査・研究を待ちたい。

*

こ

の

もほう元
模倣 2200P

平町村字11
田能という地名を
H10.11.14

「なお」前頁18頁
2.452-2/2

朝日 560.9.10 下中央

HL

●従って、荒神谷の銅剣は、畿内（兵庫など）
で作られ、運ばれてきたという見方も成り
立つ、
という。（「朝日新聞」560・9・10 付参照）
ここにあって述べると、
①「銅剣の型の出土例は少なく、福岡四、兵
庫一である」
②「荒神谷出土と同じ中細形タイプの銅剣の
鑄型が二つあり、その一つが兵庫出土のもの
である」
というのだから、兵庫出土のもののでない他の
もう一つの中細形タイプの銅剣の鑄型は、福
岡で出土したと思われる。
また、出土例が増えたのだから、
「中細形銅剣」の鑄型は、姉遺跡（佐賀）と兵庫
の田能遺跡（兵庫県）で出土している。
ともいう。（「古代出雲文化展」島根県教育委
員会、朝日新聞社、四六頁参照）
現段階では単なる想像にすぎないが、扶余系殷民の子孫達か
「中細形銅剣」九州地方、中国・近畿地
方の両地域で作っていた。
というところなのではなからうか、
* かも知れない。

「自ら」2版 145行
(20)

はいめとする
やまのり 2451
数第の代主国引 2.453

中元形銅剣
2451

天つき
改行

■我々は通常、北九州・山口地方を「銅剣・銅
鉾文化圏」、中国・近畿地方を「銅鐸文化圏」
と呼びならわしている。
■とはいえ、言うまでもなく「等の武器」
「北九州地方に銅剣・銅鉾・銅戈が有ったの
に対して、中国・近畿地方に武器が無かった
とは考えられない。(既述)」
■中国・近畿地方に武器が無かつたものなら
ば、もっと早い時期に「銅鐸文化圏」は滅亡
していったであろう。
■しかし、長期間にわたって東・西二つの文
化圏が並立していたとすれば、北九州・山口地方のみならず中
国・近畿地方に於ても、「中細形銅剣」を以
しめとする武器が作られていたに相違ない。
■ただ北九州・山口地方と違って、中国・近畿
地方には武器を墓の中に納める風習が無かつ
たので、弥生時代当時——現在その実体を知るこ
とが困難なだけなのだろうと思われる。
■其の神谷遺跡は、事の成り行き上「やむなく自
分の武器を地中に埋めた例外」なのではある
まいか。自分達の手で

九州の細形銅剣 厚板録 吉備の古代王国 311 358本 2449 2 3/2 34
 353 414 2452 5 file 2450 の 2.454 - 1/5 111 120 93 358
 2449-2 2449 2 3/2 358本 2449 2 3/2 358本
 2449 1/6 85 40 40 40

北九州・山口地方からなだれ込んできた倭国の兵庫
 に破れて逃げ惑い、山陰地方へ追いつめられた
 落武者達か、いよいよ命を決し、降伏しようとする
 間際に、
 近いうちに、必ずや再起を図ろうと
 と固く誓い合ひ、
 銅鐸・銅剣の中細形銅
 剣、およびあつた九州勢から奪いとって持
 つていた銅鐸を、穴の中に並らべ、人知れず
 土をかぶせた
 と推察される。

荒神谷遺跡では、中細形銅剣ばかり三五八
 本が、整然と並べられていた
 恐らく、これらの中細形銅剣こそ、銅鐸文
 化圏の者達か、
 所持していた武器
 だったのであろう。
 扶余系殷民の子孫等に作らせ

銅鐸は、銑型の合めせ目のヒレを上下に
 位置させた状態で出土した
 という。
 土中に埋まっていた銅鐸を掘り出す時、

先ずヒレを掘り当てて、本体である胴部

④2449 行向かい合わせ
3.3km ⑤2449
36下

2.454-3/5

大岩山 朝日 48.10.17
④2454 市町界896
4558

「銅鐸の谷」 4P
④2701 1/2

39個 ⑤2454-5/5 10年
下段

に傷をつけないうらたいた
と考え、ヒレを上下に位置させたのだろう、
と想像される。

その後、日荒神谷遺跡のすぐ近く、鳥根
県大原郡加茂町の谷の奥の、日加茂岩倉遺跡
で、銅鐸三十九個が見い出された。(写真図版404参照)
これまでに全国で約四百五十個の銅鐸が見
つかつているが、埋められた当時の並べ方が
わかるのは、荒神谷遺跡・滋賀県野洲郡野

洲所の大岩山遺跡・加茂岩倉遺跡等の数ヶ所

しかないという。

荒神谷遺跡で出土した三対六個の銅鐸は、
鈕（つり手）側を向かい合わせて埋められて

いたが、一方、三・三が離れてい
ない加茂岩倉遺跡の銅鐸のうち、まだ埋まっ

たままの二対二個は、底部を向かい合わせた

形で並んでいた。

とは、荒神谷遺跡の銅鐸も、加茂岩倉
遺跡の銅鐸も、

2.454^P-3/5

2701^P-7/5

- ・カラー
- ・頁の上半分に大きく載せ下さい。



140G

写真図版 404 ^{かもいあくら}加茂岩倉遺跡で出土した銅鐸 ^{どうたく}

130G

『銅鐸の谷』^{おおはら}加茂岩倉遺跡と出雲、アサヒグラフ別冊、朝日新聞社、1997年11月10日発行、
^{かも}島根県大原郡加茂町の谷の奥で、39個もの銅鐸が発見された。1996年10月14日のことであった。

46^P

← 39個 前頁

「(カ) 類 左
其の上 21313

2.454-5

朝日 H8.10.25

朝日 H8.10.17

朝日 H8.10.15

H8.10.25

2.454 全 394 の銅鐸

大岩山 2.454-35 11行

不明?

左右にある飾りの「ヒレ」を並べた状態
で埋められていた。
という点では同じであった。
一八八一年と一九六二年に、三ヶ所から計
二十四個見出された大岩山遺跡では、大きな
銅鐸に中・小の銅鐸を各一つずつ入れた口入
れ子凸状態などの三組九個か、鈕の向きを互
いに違えて並べられていた、とされる。
一方、加茂岩倉遺跡の場合、三十三個の銅
鐸のうち、口入れ子凸は九対十八個だった
という。
手抜きだったのかもしれない
という。
なるほど、そうなのであろう。
その上、掘り出す時に、探し出す手間が省
ける、という便利さがある。
銅鐸は、掘り起し作業中に傷つかないう
う、利点もある。

銅鐸は、掘り起し作業中に傷つかないう
う、利点もある。

H30(2018) 6.17(日)~6.18(4回)

正

現在、多数
多数見られている。(H30.6.17)

2.454-5

2454-3/5 F どうはん云 1577P
394
2454 同記
どこに有るのか不明
H12.10.8

朝日H8.10.25
H8.10.25

また、
加茂岩倉遺跡出土の銅鐸のうち一個は、
奈良県北葛城郡上牧町で見つかったとされる
上牧銅鐸と同じ鑄型で作った日兄弟銅鐸(同
范銅鐸)である。
という。(「朝日新聞」平成八年十月十五日、
十七日、二十五日付参照)
その後、同范銅鐸の数は次々に増えてゆき
一九九七年二月一日現在、加茂岩倉遺跡
出土の三九個の銅鐸のうち十五個、八組が同
范銅鐸と考えられている。しかも、今後クリ
ーニングが進めば、その数はさらに増える
予想される。
という。(「古代出雲文化展」島根県教育委
員会・朝日新聞社、二六頁、二七頁の四表参照)
銅鐸の武器を並らへ置いた例
加見い出されるかも知れない。(第三表他参照)
をみるものではない。
想像の域